

挑戦する、決断する、
実行する、貫徹する。
胸を張り、前を向き、
地を踏みしめて行く人の
背中を押すのは、情熱のエンジン。
胸に秘めたその在りようを聞く。

スタジオジブリ プロデューサー

鈴木 Toshio Suzuki 敏夫

プロフェッショナル魂が 引き出したファンタジー

大きな仕事を前に、ワクワクできるのは才能だ。
偉大なアーティストと出逢ったその才能が、
世界中のスクリーンに観客を吸い寄せた。

Text: Akira Yokota
Photograph: Yukio Yoshinari

どんな仕事もやり遂げてこそプロ 若き編集者が引き寄せた出逢い

今や日本のアニメーション映画は、大人の鑑賞に堪える良質なエンターテインメントとして世界で評価されている。単なる娯楽映画の域を超え、日本発の文化のひとつに数えられることも少なくない。その中心となったのが、宮崎駿監督の作品群。「となりのトトロ」(88年)「魔法の宅急便」(89年)「紅の豚」(92年)……と作品名を並べるだけで、多くの人が印象に残る場面を挙げることができるだろう。本誌の表紙を描いていただいている男鹿和雄氏も、その多くの作品で美術を担当して、銀幕のファンタジーを創出してきた一員だ。

97年に公開された「もののけ姫」は地球環境と人間がいかに共存すべきか、という論議を世界に呼び起こし、01年の「千と千尋の神隠

し」では、日本における映画興行収入の新記録を樹立。昨年の「崖の上のポニョ」のヒットも記憶に新しい。

それらの作品を制作してきたのがスタジオジブリ。そこでプロデューサーとして辣腕を奮い、企画から宣伝、キャスティングまで目を配り、興行成績に責任を負ってきたのが鈴木敏夫氏だ。彼は、30年前には一部のアニメファンにしか知られていなかった宮崎監督を表舞台に送り出した張本人でもある。鈴木氏がいなければ、今日の宮崎アニメの成功はおそらくなかったのだ。

ただし、敏腕映画プロデューサーといわれて多くの人が思い浮かべるであろう、情熱に燃える根っからの映画人のイメージを、鈴木氏はあっさり否定した。

「たしかに僕は子供のころから映画が好きだったけれど、好きなことを仕事にするつもりはなかった。仕事はあくまでも生活の糧を得

鈴木氏と宮崎監督のコンビによる、記念すべき初作品が「風の谷のナウシカ」。宮崎氏の映画会社時代からの盟友である高畑勲氏が初プロデューサーを勤め、鈴木氏自身もその傍らでプロデューサーの仕事のなんたるかを学んだ作品だ。原作は鈴木氏が編集していたアニメ雑誌に連載した漫画。



Toshio Suzuki



るための手段と考えていました。だから大学を出ると、食うためと割り切って出版社に就職したんです」と言うのだ。

鈴木氏が大学を卒業した72年は、日本映画が衰退し、存亡の危機すら叫ばれていた時代。映画会社の求人もなかった。「たまたま学生時代にアルバイトで文章を書く仕事をしていて、『文才があるね』なんてほめられたんです。だったらそれを活かす仕事を、と出版社を選んだ」

文字にするとなんだか投げやりに聞こえるが、入社して週刊誌の編集部配属された若き鈴木氏には、ひとつの決意があった。

「3カ月でプロになろう、どこへ行っても一生食べていけるだけの実力をつけてやろうと思ってたんです」

その決意を实践すべく、彼は精力的に取材に駆け回り、記事を書きまくった。題材は何でもござれ。週刊誌の次に配属された子ども向け雑誌の編集部でも同じだった。

「仕事なんだから、題材に好き嫌いなんて関係ない。週刊誌での暴走族の取材も、子ども向け雑

誌でのテレビ番組の取材も、僕にとっては同じことだったんですよ」

誌でのテレビ番組の取材も、僕にとっては同じことだったんですよ」

鈴木氏の愛するプロ野球にたとえるならば、どんな球でもきっちり打ち返して仕事を果たす。そんなプロフェッショナルな生き方こそ、彼の望んだものだったのだろう。

そうして30代を迎えるころ、鈴木氏に上司が命じた新しい仕事がある。本邦初の本格アニメーション情報誌の創刊だった。そこで彼は取材対象として、宮崎氏との出逢いを果たすことになったのだ。

連戦連勝の宮崎アニメはお祭り気分から始まった

アニメーションといえば、当時からオタク、つまりディーブなファンの多いジャンルだったが、もちろん鈴木氏はアニメオタクではなかった。それまでと同様に、与えられた仕事として売れる誌面を作るだけだ。そこで

ファンの間で評価の高かった宮崎氏に取材を申し込むのだが、ファーストコンタクトで、鈴木氏はけんもほろろにあしらわれた。宮崎氏は「そん



©2001二馬力・GNDDTM

01年に公開された「千と千尋の神隠し」は、洋画の「タイタニック」を越える、日本映画史上最高の興行収入を記録した。304億円、動員数2350万人は、今なお破れていない。また興行収入ベスト10の中には、「ハウルの動く城」(4位)、「もののけ姫」(5位)、「崖の上のポニョ」(8位)と、宮崎+鈴木作品が4作品も占めている。



©2008 二馬力・GNDHDDT

昨年公開された「崖の上のポニョ」では、作品の内容もさることながら、主題歌を歌った藤岡藤巻と大橋のぞみという異色のユニットも話題を呼んだ。そのキャスティングも鈴木プロデューサーの仕掛け。じつはオジサン二人組の片割れ、藤巻直哉さんは、広告代理店のジブリ担当者。学生時代に藤岡孝章さんとのバンド活動の経験があることに目をつけて、鈴木氏が引っ張りだしたのだ。

なくならない雑誌にコメントするつもりはない」というのだ。

しかし、それで鈴木氏のプロ根性が燃え上がった。

「プロなら一度や二度断られたからって、引き下がっちゃダメでしょ。何がなんでも食らいついて仕事をやってのけるのがプロ。取材できませんでした、では沽券にかかわると思ったんです」

当時「ルパン三世 カリオストロの城」を制作していた宮崎氏の元に通いつめ、彼が仕事をしている脇に朝から晩まで黙って座り続けた。そうして何日も過ぎたころ、宮崎氏は描きかけの絵コンテを見せて「こういう場面、なんていうんでしょうね」と、セリフのアイデアを求めて初めて口をきいてくれたのだ。

一度打ち解けてしまえば、仲良くなるのに時間はかからなかった。胸襟を開いて話すうち、鈴木氏は宮崎氏の才能と個性を知り、映画作りへの夢も感じ取る。当時はちょうど、活字と映像、音楽のメディアミックスが話題になっていた時期。勤め先の社長からも「企画があれば持ってこい」と言われていた。そこで、鈴木氏が作っていたアニメ雑誌に宮崎氏の漫画を連載して、それを映画化する方向へと話が進んでいく。そうしてできあがったのが84年公開の「風の谷のナウシカ」だった。

「映画作りは、いってみればお祭りで、楽しかったけれど、本当はそれ1本で終わるはずだったんです。ところが、望外のヒットで儲かった宮崎さんは、映画会社勤務時代の先輩で『ナウシカ』のプロデューサーも頼んだ高畑勲監督の念願だったドキュメンタリー映画に出資した。だけど

高畑さんが凝りすぎて、予算を使い切っても映画が完成しないんです。困った宮崎さんが、『鈴木さん、どうしよう』と言うから、それなら、とひねり出したのが、もう1本宮崎さんの映画を作って、そこから高畑さんの映画の予算も捻出するというアイデアだったんです」

映画作りはビジネスとしてはリスクなのが常識。ところが鈴木氏は困った友を救うべく、勤め先の出版社から出資を引き出して制作会社まで作り、2作目の制作に乗り出したのだ。その会社が、スタジオジブリ。こうして86年に公開された「天空の城ラピュタ」は見事に当たり、88年の「となりのトトロ」へとつながっていくのである。

このころ、鈴木氏はアニメ雑誌の編集長の重責を担いながら、事実上、スタジオジブリのプロデューサーも勤めるという二足のわらじを履いていた。その忙しさは想像を絶したはずだ。しかし彼はそれを完璧にやり遂げた。ジブリ専従となるのは「魔女の宅急便」公開後の89年のこと。以後、このコンビは今日まで作品のすべてをヒットさせてきた。まさにプロフェッショナルであり続けているのである。

毎日が真剣勝負の積み重ね そして振り返れば楽しい日々

「宮崎さんとは、たまたま気が合っただけ。映画作りを始めたころは、まさか彼がこんなに頑張ると思わなかった。おかげで僕の人生大変ですよ」と鈴木氏は笑う。

「だけど楽しい毎日でしょう」と聞くと、「仕事なんだから、毎日楽しいこ

とばかりじゃない。後で振り返ると楽しかったなあ、と思えるけれど、そもそも仕事に楽しさなんか求めちゃダメですよ」

そこで取材に立ち会っていたジブリのスタッフが吹き出した。「毎日楽しそうですね」と。鈴木氏は「そうかなあ」と首をひねる。

もちろん、個性の強い宮崎氏との喧嘩別れの危機も、一度や二度ではないという。しかし「宮崎さんは、たしかに凄い人です。でも、映画監督というのはやっぱり変な人でもある。一緒になって僕がおかしなことをしているわけにいかないから、つきあうのは大変だけど、大変だから面白いんです。最近は、この人とつきあうちに、僕は人格的に成長できたんじゃないか、なんて思うんですよ」と最後にまた笑わせた。

「僕はこれまで、大きな夢とか目標を持ったことはないんです。目の前の仕事をこなしながら、気がついたら生きている、というその日暮らしの人生が理想なんです」と言うのは、ある種の韜晦^{とうかい}というものだろう。思い描いていた理想はどうあれ、希有な才能と出逢い、それを引き出して成功を取める職業人生が、楽しくなかったはずはない。まして「どうも僕は現場が好きみたい」と言い、「胃の痛い思

いって、したことがないんです。プロデューサーに必要な資質って、くよくよしないことかもしれない」という持って生まれた性格があれば、鬼に金棒だ。

たぶんこの人はきつと、どこでどんな仕事をしていたとしても、大きな相手を見つけては、面白がってその力を引き出そうとしたに違いない。素晴らしい素材を得た料理人が目を輝かせるように。登山家が、つねに前人未到の高みを目指すように。

宮崎監督との邂逅^{かいこう}を、得難い出逢いと表現した記者に、鈴木氏は「そんなんじゃないですよ」と手を振った。OK、主語を変えましょう。鈴木さん、ジブリ作品を観る世界中の観客にとって、2人の出逢いはこれ以上ない、得難いものだったのです。

P R O F I L E

すずき としお 1948年名古屋生まれ 株式会社スタジオジブリ代表取締役プロデューサー
慶応義塾大学卒業後、総合出版社の徳間書店に入社、「週刊アサヒ芸能」「テレビランド」各編集部を経て「アニメージュ」創刊に参加。その連載漫画を原作とする「風の谷のナウシカ」で映画制作に参入し、スタジオジブリ設立にもかわる。89年よりジブリ専従となり、高畑勲監督による91年の「おもひでぽろぽろ」より正式にプロデューサーを勤め、以後のジブリ作品のすべてを制作する。「千と千尋の神隠し」は02年の第52回ベルリン国際映画賞グランプリを獲得。同年のエランドール賞ではプロデューサー賞を受賞するなど、国際的にも高い評価を得ている。04年から08年まで東京大学のコンテンツ創造科学産学連携教育プログラム特任教授も勤めた。



セーターにジーンズのラフな服装に、真冬でも雪駄履き。スモーカーを公言して、仕事でもタバコを手放さない。プロデューサーとしての緻密な仕事ぶりとは裏腹に、私生活では「宮崎監督とどこかに出かけるとき、チケットを手配してくれるのは宮さん。仕事を離れると、どこかポイントがズレているんですよ」と笑う。

